

保健体育科

I 個人の能力差を考慮した学習指導 IV

—— 生徒の創造性を生かした徒手体操の指導 ——

天野 菊三郎 原田 秀雄 北田 明子

要 旨

個人の能力差を考慮した学習指導として、適切な目標の設定は、生徒の学習意欲を高め、学習効果をあげるため重要なことである。今年度は新らしく徒手体操をとりあげ、一連の徒手体操の創作をテーマに実験研究を行なった。

はじめに

創造性の開発ということがいわれているが、体育の学習場面について考えてみると、直接的に、あるいは狭義での創造ということが充分行なわれるのは女子のダンス学習における創作活動である。勿論学習のいろいろな場面で生徒がそれぞれの創造性を発揮し、学習に生かしていることも少なくないであろうが、その創造されたものが作品として、あるいはそれぞれの個人のものとして形になって残ることはない。したがって女子の創作ダンスの作品のように生徒個人々々の作品を創りあげる学習活動を、男子の教材の中に求めるならば一連の徒手体操の創作という場面が考えられる。しかし学習時間の配当の点で徒手体操に女子のダンスほどの時間をとることには無理がある。そこで今年度特に徒手体操に従来よりも多くの学習時間を配当してみた。一般に徒手体操の時間はスポーツ教材の準備体操、体力づくりの一環としてのトレーニング運動等に時間をとられて、徒手体操本来の目的のために使われる時間は少ない。しかし男子の生徒がこの体操の創作という体験にどのように反応するかについて今年度の研究方針をたてた。

目 的

徒手体操の創作という学習場面の中に次のような点をまず考慮した。今までそうした学習経験のない生徒たちに創作活動の楽しさを体験させるにはどうしたらよいか。次に学習の形態をどのようにするか。さらに作品の発表、評価をどのようにするかという点である。こうした方法上の問題点のうえにたって、生徒が創作活動についてどう反応するかを調べ、その結果に

ついて検討することとした。

方 法

ラジオ体操第1の音楽に合わせて各自体操を創る
学習者 中3男子46名
学習時間 10時間
学習形態

7～8名ずつの6グループ無作意編成

第1時～第4時、準備学習、グループごとに各自自分の創った体操を1つずつグループ全員に教え、号令をかけて演技させる。できるだけ多く体操を考え、演技する。

第5時～第8時 創作学習、ラジオ体操第1の音楽に合わせて各自体操を創作し、練習し、修正し完成する。

第9時～第10時 作品発表及相互評価
結果の整理と考察 アンケート方式による。

結果の整理と考察

以上あげたような方法によって行なわれた学習についての生徒の感想文とその感想文をもとにして作ったアンケート調査によって創作活動についての反応をみることにした。

1. 創作についての生徒の反応

体操を創るということについて

創作はむづかしい	28名 (66%)
創作は大切だ	7名 (16%)
創作は楽しい	4名 (10%)
創作は面倒だ	2名 (5%)
創作は時間がかかりすぎる	1名 (3%)

男子の生徒の創作に対する答は以上のように、新しい経験に対するとまどいが読みとれる。このことは以後

のアンケートの結果にも一貫して現われている。創作の楽しさをもっと多くの生徒に体験させようとした意図は達せられなかった。

創作活動の過程について

学習過程	創っているうちに面白くなった	10名 (23%)
	創っているうちにいやになった	5名 (12%)
創作技術	同じようなものばかりできて変化をつけるのに苦労した	34名 (81%)
	図解して記録するのがむづかしかった	22名 (52%)
	リズムに合わせたものを作るのがむづかしかった	18名 (43%)
	リズムが決められていたので作りにくかった	15名 (36%)
	基本の体操をもっとやるとよかった	11名 (26%)
学習態度	練習態度は余りよくなかった	11名 (26%)
	一部の人が不まじめであった	7名 (17%)
	みんな一生懸命やった	3名 (7%)
	一部の人以上だけ熱心であった	3名 (7%)

徒身体操を創るうえの原則的なものについては、学習の初期の段階において生徒に一応理解させ、さらに体操の図解の方法についても簡単に教えた。こうした準備段階を経て次第に創作の時間にはいったのであるが、グループ活動の形で、しかも指導者がグループを廻って見てやるという学習形態では、生徒を学習に集中させることが意外とむづかしかった。この辺が学習形態に一考を要する点である。このように生徒を学習に集中させられない状態では、創作の楽しさを十分体験させるという初期の目的を果すことは困難であろう。

次に感想文を読んでみて意外であったのは、作品を創る音楽として取りあげたラジオ体操第1そのものについて、相当数のものが創作のむづかしさを感じると同時に、ラジオ体操のよさをあらためて見なおしたということである。ラジオ体操に対してのアンケートの

ラジオ体操が立派な作品であるということがわかった	18名 (43%)
ラジオ体操を創った人の苦労がわかった	17名 (41%)
ラジオ体操を一生懸命やらなければいけないと思った	4名 (10%)
ラジオ体操のようなよい作品を作りたい	3名 (7%)

結果は次表のようであったが、これは予想しなかった生徒の反応といえよう。

2. 作品の発表と相互評価について

作品の発表について

みんなの作品を演技としてみるの楽しかった	16名 (38%)
みんなの発表をみて自分の作品に自信がなくなった	13名 (31%)
みんなの前での演技ははずかしかった	8名 (19%)
自分の練習不足を痛感した	5名 (12%)

作品の発表は体育館のフロアでみんなの前でラジオ体操第1のレコードに合わせて1人ずつ行なうことにした。それと同時に各自それぞれの演技に対して4段階、作品そのものに対して4段階の2つの評価を行なった。演技そのものは表のようで人を見るのは楽しかったが自分が演ずるのは恥かしかったとか、もっと練習しておけばよかったという反省が多い。球技のようなチームゲームや器械運動のように個人技ではあってもみんな同じことをやるのとはちがった意味の経験に対する生徒のもっともな反応がみられる。

相互評価について

相互評価はむづかしい	19名 (45%)
相互評価は感情的になりやすい	16名 (38%)
相互評価は楽しい	4名 (10%)
相互評価は公正だ	3名 (7%)

相互評価についてはやはりそれぞれの主観による評価の困難さを言っている。こうした自分以外の全員の演技について評価を行なうことについては初めての経験であるが、採点票を整理してみた結果からみると案外公正に評価がなされているように思われる。それと同時に評点が割にきびしいことに驚いた。

まとめと今後の計画について

創作について男子の徒身体操をとりあげ、はじめて行なった実験研究であったが、これは予備実験とも言うもので今後これを基にさらに発展的に研究は進められなければならない。そこで今後のための問題点をあげると次のようである。

1. 創作学習の経験

このことは女子のダンスの創作学習が小学校からの積みあげのうえに行なわれていることから考えると、相当の差が感ぜられる。したがって男子においてもそ

うした創作経験をもっと機会をとらえてもたせることが今後創造性の開発へもつながる学習活動として必要であろう。

2. 音楽の選択

今回は創作のもととなる音楽としてラジオ体操第1を取りあげてみたのであるが、本校においては毎朝始業前にラジオ体操を日課として行なっているということ、体育の授業においても準備運動としてラジオ体操を行なうことが多いためにそのメロデーやリズムは生徒の頭の中によくはいつている。このことは創作活動にプラスの要因ではないだろうか。勿論作品を創りそれに曲までつけることができればそれが理想なのだろうがそこまで生徒に要求することは困難であろう。とすればメロデーやリズムが頭の中にあることを思い出しながら、あるいは口ずさみながら作品を考えてゆくことができることは創作活動を容易にする。そうした意味で今回ラジオ体操第1の音楽を取りあげたことは創作を容易にした要因といえよう。

3. 学習形態

創作活動は個人的なものであり、創造性は個人によってみな異なっている。また表題にあげたように個人の能力もまた一人一人異なっている。そこでこうした目的の学習を行なうためには個々別々の学習形態をとるのが通常であろう。それをあえてグループ学習の形態をとったのは、創作準備学習の段階において、できるだけ多くの基本的な学習を効果的に行なおうとした意図による。しかしその結果は準備段階における指導の不足にもよるのであるが余りうまくいかなかった。そのことはアンケートの結果にも学習態度はよくなったとか基本練習をもっとよくやればよかったという解答となってあらわれている。しかし生徒の能力差の開きをちぢめ、効果的な学習を行なうためには、やはりグループ学習の形態によって、それに何らかの工夫を加えることで解決できるのではないかと考える。

4. 創作技術

創作学習そのものがはじめてであるために今までのものをすぐに発展させ、新しいものを創り出すということに対しては、例えば課題として与えられたとはいえ、直ちにそれに対応することはできなかった。したがってグループ学習にはいつて創作準備学習を行なう時点までのオリエンテーションにもっと時間をかけることが以後の学習活動に一番重要なことであるといえよう。

5. 教師の役割

グループに課題を与え、学習活動が展開した場合における教師の役割は、グループを順次指導しながら適切な指導と助言を与えてゆくことにある。この段階においての指導と助言が十分でなければ以後の作品の作

成や練習に十分な成果は期待できない。この時点で教師がどのように動き、どのように生徒やグループの中にはいつてゆくかが今後教師に与えられた課題であろう。

6. 創造性の開発

こうした学習が直ちに創造性の開発につながるのか否かについては異論もあろう。しかし従来女子の創作ダンスにしかなかった作品を創作するという学習活動を男子の徒手体操の学習場面にもちこんだという点で生徒にとっても、教師にとっても新たな課題を与えられた結果となり、創造性の開発を云々する以前の問題でいろいろ検討されなければならない問題を含んでいる。したがって創造性の開発という点については、さらに検討を加えてからの問題となろう。

7. 作品の発表

自分が創ったものをみんなのまゝで発表するということは創るということ以上に勇気のいることであり、さらに発表意識が創作活動に影響を与える。これに対しては生徒の反応はまちまちでプラスとするもの、マイナスと考えるものがあると思われるのであるが、やはり、創ったものをそのままにしておかないで、何らかの形で発表する機会を与えるということが必要と思う。

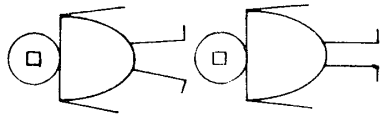

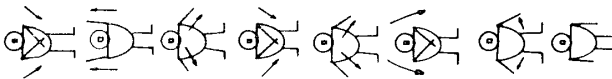
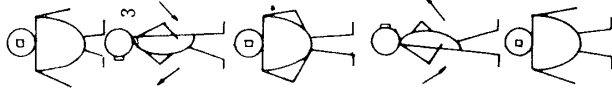
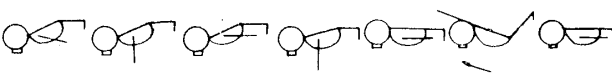
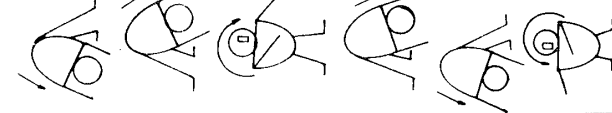
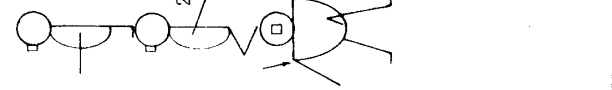

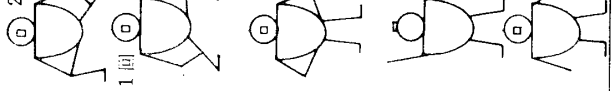
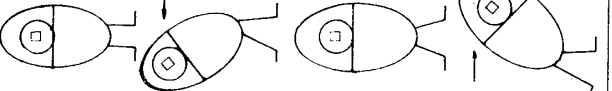
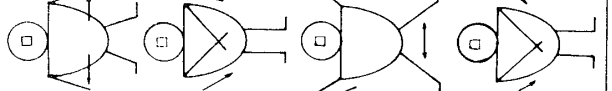
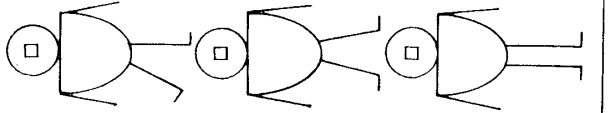
8. 評価

前にも述べたとおり、作品に対する生徒の目の厳しさに驚ろかされたのであるが、自分の創ったもの、自信をもって創りあげた自分の作品を基準にして人の作品をみる。それがさらに次の創作活動に対しては何らかのプラスになるとすれば、そうした創作活動の機会をできるだけ早く与えてやる必要があるのではないだろうか。

むすび

今後創作とか創造性の開発という問題について男子のみでなく、女子の創作ダンスの学習とも対応して、データを集め比較研究していきたいと思う。

自作体操図解 中3〇組〇番氏名 (〇〇 〇〇)

順序	運動	部位	図 解	呼吸数	運動の方法
1	かかと	かかと		8	1 かかとをあげる 3 4 おろすあと同様
2	前上拳振	上肢		16	1 手を前へ上げる 2 3 上まであげる 4 おろすあと同様
3	内外回旋	上肢		16	1 前で手をくみ 2 外へひらけてなかでくみ 3 内へひらけてなかでくみ わも同様におこなう
4	捻転	胴体		16	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 1 こしを右へ3回ねじる 6 5 4 3 2 1 左へねじる
5	伸屈	背腹		16	前へかかんで手を前へ2回 そのあと大きくさる 同様におこなう
6	回旋	背腹		16	からだを右側と左まへへ まげ 右からうでを大きく まわす
7	伸屈	上下肢		16	1 前 2 右 3 前 1 左のじゆん番で おこなう
8	捻転	胴体		16	1 前へ手を出す 2 1 前へ手を出す 3 2 前へ手を出す 4 3 前へ手を出す 5 4 3 2 1 前へ手を出す 6 5 4 3 2 1 前へ手を出す
9	伸屈	下肢・背腹		16	足を右からまげる2回 左へ1回 うしろへさる
10	伸屈	体		16	からだを右へまげる 左へまげる 同様に2回目もおこなう
11	跳躍	全身		16	1 足と手をかろくひろげるとぶ 2 足と手をまてくむ 3 大きくとぶ
12			3 と 同 じ	16	3 と 同 じ
13	深呼吸			16	全ふんことは考えずに 深呼吸だけやる

(注) この作品は生徒の相互評価で最高点を得たもの